
モブキャラ(仮)

山子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モブキャラ（仮）

【Nコード】

N9807V

【作者名】

山子

【あらすじ】

確かに、私は守られていた……。後輩に巻き込まれて異世界トリップしました！微妙な境遇の中で、それなりの生活を満喫中だったのですが転機の訪れで生活が一変しました。オタクな少女が、これから異世界で愉快に生きていきます！

登場人物メモ（前書き）

ある意味、作者のための人物表です。

ふえたりへつたり。

ネタバレ注意かもです!!!

登場人物メモ

*** 登場人物 *** 登場準

安西桃子 あんざい・とうし 18歳

身長150? 華奢な体系。FよりのEカップのバスト。

アウザー（男）と偽り暮らしている。

黒茶の髪と瞳を持つ生粋の日本人。異世界トリップモブキャラと自負している。

オタクでコスプレイヤー兼同人作家（小説書き）

将来の夢は、アニソン歌手！

左足を痛めたために少し歩みが困難。

ティエンティナ・ティティ・デル・ファールンソティー伯爵夫人
37歳

身長170?台 豊かな金髪の美女。肌は透けるように白く、赤くぼつてりとした唇に空色の瞳

愛称は、ティナー

桃子を我が子のように可愛がっている。

おっとりとした性格だけど強い女性でもある。

テレサ・オースティン 20歳

身長170?台 赤毛の女性。

商家の三女生まれ。行儀見習いのためにティナーの侍女となる。

気が強く主と桃子命の頑張り屋さん。

ロランとマルス

元々の村人。ロランは奴隷農民。マルスは奴隷娼婦。

アルディオ・ジルファ・デル・ア・メノンド 28歳

2?台 鋼色の髪。夏の森の瞳（緑）

騎士団特部隊・隊長。魔法騎士で普通の人が1つしか使えない魔法
資質だけど、

四大元素、光闇の魔法が全て使える。

それは、母が絶滅した古代竜だから。人間と竜のハーフ。

カイザー・ステルツ・デル・ファールンソティー伯爵 52歳

***** 世界観 *****

世界の名前は不明。人々は世界と言う。

アズミ大陸・ポメタニ大陸の2つの大陸がある。

島々も多数。

国は軽く50ヶ国はある。部族も多数ある。

人間・エルフ・獣人・亜人・魔族がいる。

精霊もいるが、上記と違って肉体を持たず、自然から生まれ自然に還る。

魔族は悪魔的な意味ではなく、四大元素の他に闇魔法が得意とする種族。

エルフは精霊に性質が似ていて四大元素の他に光魔法を得意とする種族。

国の名前

アッスラーダ

プロローグ（前書き）

更新遅いです。激遅です。
誤字等の指摘歓迎です。

指摘次第では、消去してR18に載せます。

感想待ってます！

プロローグ

創世。

世界が『神』と呼ぶその存在は、別の場所からやって来たという。彼は彼らでもあり、女であり男でもあった。彼は彼らは、この世界を観察対象と定め、まだ生まれたばかりの世界に命の種を蒔いた。種が芽吹き始めると、世界は少しずつ変容していった。大陸が増え、草木が茂り、真水が沸いた。

それと同時に四大元素に属する精霊、光とは反対の性質を持つ闇の精霊も生まれた。

精霊たちは、自分たちの資質から魔法を作り出し世界に流す事で自身と似た生き物が生まれるのを促した。エルフと魔族だ。

2種族は、世界の美しさを持つ容姿をした者が多く繁殖能力は極めて低いが長寿であった。それらも長い月日を経て変容した者も増えていった。

それだけではなく、世界は小さい生き物から大きな生き物まで様々な種を作り、最後に『神』と呼ばれる存在が世界に溶け、その『神』の残滓から人間・獣人・亜人という種族が生まれた。

『神』は、そうする事で全てを観察を可能とした。

『神』は観察する。様々に文明が生まれては滅び、進化していくのを。

『神』は観察する。魔法が変容するのを。

『神』は観察する。世界そのものを。生き物も死んだ者も全てを観察する。

観察は順調だった。そのはずだった。だが突如として大地に流れる力の脈に異変が起こった。

大地を巡回する脈が破れ、そこから漏れ出した力は世界に悪影響を与えた。加速する戦争、血を好む魔物や魔族の急激な増加し、殺戮が生まれる瘴気が水源から真水を奪い、草木を枯らしていった。

世界が停滞する。

『神』は観察者。動きを見る存在。そして、肉体を持たぬ者だった。停滞は不本意であった。そこで『神』は自分の力を最大限に宿せる存在を探し始めた。幾多の次元を越え、壮大な旅をし、《それ》を見出した。

『神』は《それ》を我が子と呼び、世界には《神子》と呼ばした。

『神』は別次元に生きる我が子に自身の力を与え、我が子が世界の地を踏む事で自身の力を大地に注ぎ、脈を修復、世界を覆っている瘴気を洗浄し世界を正した。

『神』は観察する。様々に文明が生まれては滅び、進化していくのを。

『神』は観察する。魔法が変容するのを。

『神』は観察する。世界そのものを。生き物も死んだ者も全てを観察する。

世界は正常に戻ったはずだった。

だが 『神』の知らぬところで《神子》と同じ次元から『神』の力の影響を受けたものがいた。

《神子》が光臨された。

その噂が流れ出した半年前から、世界から瘴気が消えたらしい。枯れていた草木に緑が戻ったらしい。人々の中に巢食つてた闇が晴れ戦争も終戦したらしい。血を好んでいた者たちも今は影に潜んでいられるらしい。”らしい”とは、流れてくる噂が本当かどうかは実際のこととは分からないから。

だって、世界が平和になろうとなるまいと小さな空間の中で生きる私には全く関係ないことだと思っていると、世界を夢見るだけ虚しくなるって知っている。だから、自分からあえて虚しくなることなんてしない。

私の毎日は夜明けと共に始まる。ダボダボの薄汚れたシャツとツギハギだらけのズボン姿に着替え、2年前からちゃんと動いてくれなくなつた右足を叱咤しながら建物の外にある井戸で顔を洗ってから、濡らした櫛でザツと髪を梳かしてポニーテールに纏める。それから、水を食堂の瓶に汲むのだが、不自由な足での作業は思うように動かない。それが終わると桶に水を入れて部屋に戻る。

「ティナー、朝だよ」

ゴテゴテにデコレーションされた一室。10人中10人が趣味が悪いと言う様な部屋の主人である彼女を起こす。名前はティナー。豊かな金髪の美女。肌は透けるように白く、赤くぼつてりとした唇に空色の瞳、私は彼女ほど美しい人を見たことない。

ティナーは、ゆっくりと優雅に布団から体を起こす。寝起きでダルそうにしている彼女に濡れたタオルを渡し、彼女が顔を拭いている

間に背後に回る。寝てほつれた髪を梳かし首上の辺りで緩く纏める。そして、悪趣味な部屋をもっと悪趣味に見せているクローゼットから数ある衣装の中で改善しシンプルで上品なものを選んだ。今日のドレスカラーは若草色だ。

「おはよう、トーロ」

「おはようございます。誰が聞いているか分からないんだから」アウザー」と呼んで。もう、ティナー寝惚けてるでしょ」

そう言いながらティナーが着替えるのを手伝う。背中ボタンを留め、袖口に付いているリボンを結ぶ。首は総レースされた襟が付いている。服を整え終わったら次は装飾品。小碧の石のブローチを胸元に、それとお揃いのピアスだけを着け、指輪はしない。

「そうだったわ。アウザー、今日の気分はどう？健やかかしら？わたくしの可愛い子、あなたが健やかだとわたくしは嬉しいわ」

「いつも通りだよ。足はポンコツだけど元気。ティナーこそ体は平気？」

「平気よ。お腹が鳴っちゃうくらい平気」

「ふふ。もうそろそろ、テレサが朝食を持ってきてくれるはずだけど・・・」

ティナーの脱いだ夜着を片付け、布団を整えているとコンコンとドアがノックされた。一拍置いてから赤毛の女性が入ってくる。

「奥様、朝食をお持ちしました。アウザー様も席についてください」

テレサに促され席に着く。小さいワゴンから朝食をテーブルに乗せる。ミルク粥と少量のフルーツと食後の紅茶と胡桃パイ。今日の朝はご馳走だ。

はじめまして。腐女子腐男子諸君！いや、違った、婦女子紳士諸君だった。

私の名前はアウザー・・・とは偽名で、本名、安西桃子^{あんざいとち}、ピッチピチの18歳。多分。

黒茶の髪と瞳を持つ生粋の日本人女性です。ということでお分かりだろうか。私は今、巷で有名な『異世界トリップ』を体験しています！

しかも、モブキャラとして。本来なら私はこの世界には必要のない存在だったのだが、所謂、巻き込まれの異世界トリップをしてしまった。巻き込んだ張本人とは、この2年間会っていないので、どうなったのか知らない。薄情とは言わないで。こっちも生きるのに必死だったのだ。

言葉も人種的容貌も違う私は運良く？トリップして数時間で保護？され今に至るわけだが、保護といえるのか・・・まあいい。保護された場所が問題だった。

ここは、国非認可の隠れ売春村でした。トリップした時、これまた運良く某少年漫画の少年伯爵のコスプレをしていたおかげで未だに女とバレずに生活出来ています。

しかも、この世界って酸素が濃いのかデカイ人が多い。女性も然り。女性の大体の平均身長が175cmで華奢と言われる女性でも165cmはある。男性なんて恐怖だ。2mを越えてなんだよ。コエーよ。

私かというと150cmジャスト、成長期は終わっていたから伸びてないと思う。この世界で私くらいの子は10歳前後に見えるらしく子供扱いだ。ありがたい。こんな所で大人として認識されたら悲惨街道まっしぐらだ。助かった、小さくて。

だけど、身長はちっこいが、体はそうはいかない。日本にいた時から華奢ねって言われていたけど、乳は巨乳でして・・・着痩せして一見分からないけどFに近いEカップあります。

ふふふ。コスプレ万歳。ここに飛ばされて来た時に胸潰しインナーを着ていて良かった！と叫びたい。

この村で暮らして2年。未だに女だとバレずに生きています。

この世界に落ちてきた時、これは言葉のあやではない。言葉通りに落ちた。時空の穴からポイッと捨てられるように3階建てくらいの建物から弾き出され落ちた。ゴロンゴロンと転がるように落ちて片足を骨折。痛みに悶えている時に、村の親分一向に拾われたわけだ。見たことのない容姿に興味を持たれたものの細っこい体と冴えない顔が武器となったこと、言っていて悲しいが良しとする。言葉を理解するようになって分かったのだが、あの時の親分は私を見て「醜いツラしてんな、こんな売り物にもなんねえ」って言ったらしい。呪。私は平凡であって不細工ではない！彼氏いたことないけどな！奴隷として連れて来られ怪我の治療もなく打ち捨てられていたけど、親分一向の帰宅晚餐時に居合わせたティナーに拾われ、彼女の小間使いとして生活が始まるわけだ。

ティナーは本名ティエンティナと言って、30代とは思えない若々しい女性で私より少し前に攫われて娼婦にされた伯爵夫人、れっきとした貴族婦人である。彼女は侍女と護衛の数名連れ避暑に向かう途中に襲われ、護衛は殺され、侍女と共に連れ去られたらしい。

誇り高い女性。ティエンティナ。彼女は毎夜、夫ではない男に遊ばれ、抱かれるという屈辱の中、その誇りを失くす事無く強く耐えていた。いつか夫が助けに来てくれると。そう自身の心を守ることに必死だった。他人のことなんて構っている余裕なんてなかったはずだ。だけど、彼女と侍女のテレサは、治療の遅れた足を懸命に看護してくれた。言葉も分からず震えて泣くだけの私を優しく根気良く世話してくれ、時間がある時に言葉と文字を教えてくれた。

少しは金になるだろうと子分にコスプレ衣装を剥ぎ取られそうになった時も貴族の夫人の威厳で助けられた・・・ここでティナーたちに女とバレたわけだが、彼女たちは私が女だと言うことを隠して守

ってくれた。

治療が遅れた足は完治したものの少し歪になってしまっていて、まともに歩くことが出来なくなったけれど小間使いとして拾われた手前、小間使いとして働ければならない。

そこで、ティナーの身の回りの世話と足を使わない仕事をするようになった。

コスプレヤーとして培った針仕事の技術とティナーとテレサ直伝の技術を欲しいままにした私は今ではプロ並みに成長したと自負している。娼婦たちの悪趣味な衣装を可愛く改造したり、悪の村人たちの衣服を繕ったりして居場所は確保した。

ちなみに活動部屋はティナーの私室の隣の物置、約畳1畳半の場所。私の寝床である。

時々、虫の悪い輩に憂さ晴らして殴られる以外は貞操の危機もなく死の危険もなく生活出来ている。私は不幸な境遇の中でも幸運だ。

食事が終わり、紅茶を飲んでいるとテレサがそつとティナーに二つ折りされた小さな紙を差し出した。

「ロランが持ってきました」

「そつ」

ティナーはそれを読むとすぐにビリビリと破ってテレサに燃やすように指示を出した。

「今夜よ」

「ああ……！本当でございますかッ」

「ええ。ええ、そつよ」

「私、もう2度と帰れないものと思っておりました。人に知られていないこの場所を王都に知らせる手段はないと……奥様……奥様、私、うれしゅうございます」

「わたくしも嬉しいわ。これもロランのおかげね」

「はい。マルスに赤子が出来、父親としてこのままでは駄目だとロランに相談された時は驚きましたが、子供のためにも彼の者の心が完全な悪ではなかったことが幸運を呼びました。ああ、アウザー様、これからはあなた様も女性として幸せになるのです」

「そうね。わたくしの愛しい子、あなたの夫はわたくしが厳選に厳選して探すわよ。テレサ、この事は他の子たちには内密に。浮き出したって作戦が漏れたらわたくしたちの命はないわ」

「承知しました」

この世界に来て2年。この場所しか知らない私がここから出て、どうなっていくのだろうか？ティナーはここを出ても私と一緒にいてくれるって言うてくれていてるけど、彼女は伯爵夫人。体を汚された女性が元の生活に戻れるのだろうか？夫と呼ぶ人は2年間、変わらず彼女を愛しているのだろうか？死別したと思っていたら？新たに妻を迎えていたら？戻った時、彼女に居場所がなかったら？私は足手まといにならないだろうか？

逆に、彼女の夫という人が、変わらず彼女を愛していて、彼女は以前の生活に戻れるとする。だけど、私が傍にいたら、いつまでたってもこの屈辱な生活の記憶が薄れないのでは？

「こおら。また余計なことを考えているわね」

「でも・・・」

「でも、じゃないわ。ほら、仕事はじめなさい」

「はい」

自室に戻り、溜まっている衣服を検分する。昨日は娼婦のドレスの修理をしたから今日は釜男のズボンでも修理しようかなとゴソゴソと小汚いズボンを引っ張り出したところで・・・ふと先ほどのティナーたちが話していた内容を思い出した。 ”今夜” このキー

ワードは王都から騎士団がここを検挙しに来るということを表しているわけだが。魔法が生活に密着していて色々と便利だけど、自給自足が主だったものだから小汚くて中世みたい。やっぱり、王都や裕福な街になってくると煌びやかな建物があるのかな？ティナーの話だと王宮は、中東にあるモスクみたいな建物らしい。外見が真っ白なドーム型をしていて庭には尖がった塔が4つ聳え立っているらしい。北、西、東、南それぞれ離宮があつて、それぞれに素晴らしい庭があるらしい。見たい！オタク魂が萌える。なんだその乙女の理想郷は！

1ヶ月前

農夫奴隷の1人であるロランからテレサに持ちかけられた相談事。隠れて付き合っていた娼婦のマルスとの間に赤ちゃんが出来たこと。娼婦は妊娠すると墮胎を強いられること。治療師がいないこの場所で墮胎は母体に危険を伴う行為だということ。もし、墮胎を免れたとしても愛する我が子は”奴隷”にしかねないこと。自分がどうなってもいいからマルスと我が子を守りたいと決意していた。王都騎士団に助けを求めるためには、村全体に張り巡らされた魔法包囲網を抜けるしかない。だが、1人でも奴隷が長時間姿を消えたら大騒ぎになるのは必須。チャンスは数分。そこでティナーは口ランにある魔方陣を覚えさせた。その魔方陣は手紙を特定の人に届けるというもの。ロランに持たせたティナーの手紙を魔方陣から無事に飛ばすことに成功したのだ。

包囲網の外から帰ってきたロランはボッコボコにされたけど、意志の強い目は輝いていたし、父親の強さを見た！って感じたよ。

それから、手紙を飛ばして1週間たった今日、包囲網の外に潜んだ

騎士団の偵察隊からの連絡を受けて、どうやら今夜に王国騎士団による奇襲があるらしい。

ティナーが避暑に北の別荘地に行く途中に連れ去られたということと、捕まっただけからの移動時間から考えてこの村は、西の辺境の数ある村の1つではないかと推測している。表はただの村、裏では売春斡旋組織のアジト、これでは、いくらティナーを捜索しても見付かるはずはない。

ティナーや娼婦たちは、ずっと村長邸の地下に秘かに作られた部屋に監禁されていたのだから。彼女らが外に出るのを許されたのは数日に数分の日光浴の時だけだった。それも村長邸の庭のみ。

住んでいた村人たちも逃亡防止のために、村から一定の距離離れたら電撃が体に流れるような魔具を着けさせられていたし、どんな小さな村にもかけられている守護魔法を変形させた結界は、一見しただけではそれが変形しているとは気付かれない様になっている。大穴だ。落っこちそうだぜ。

推測するに、この売春組織はきつと裏に大物が付いているはずだ。じゃないとこんな村をまるっと乗っ取るようなことは出来るはずない。それに2年間も貴族夫人を監禁し続けるなんて不可能だろう。庶民と貴族の捜索では規模が違うのを前提としたら、だが、そう考えると宮廷でそれとなく捜索を阻める立場・・・ある程度力のある人物が悪の親玉だと思ってみたり。

ま、今日の奇襲で親分たちを吊るし上げて吐かせれば、全部とまでは言わないけれど、少しは背景も見えるんじゃないかな。

「・・・ザー様ツ！アウザー様つたら」

「ツわ！」

「お昼でございます。手をお休めになつてくださいますせ」

「ん。ありがとう。ティナーの部屋？」

「そうでございますよ。今日はフアンのガルチーズ焼きですよ」

「本当！どうしたの今日、なんか朝からご馳走だね・・・夕食も凄かったりして。うわー、なんかちよつと怖いんだけど。なんか裏があつたりするの・・・天国から地獄みたいな」

「豊饒祭”が近いからだと思えますわ。去年もこの時期は少しだけ豪華でしたわよ」

「ああ。そうだった気がする。こんなところでもお祭りはするんだね・・・ってことも去年言った？」

「言ってみましたとも。さ、お立ちになってくださいまし。奥様がお待ちですわ」

ふふふと可愛く笑いながらテレサが急かしてくるのでそれに従う。立ち上がりながらこんがり焼けたファン（フランスパンのように硬くて香ばしい穀物っぽいもの）の上にとろりと溶けたガルチーズ（ヤギみたいな生き物の乳から作ったチーズ）の想像をして、ウヒヒと下種な笑いを零してしまった。そこ！テレサ！そんな風に眉を顰めないで！！

10代の人間つのは食欲と妄想で出来ているんだからね！だからね！！

ティナーの部屋に行くと、なにやら朝着替えたドレスを脱いでネグリジエを着込んでいるではないか。

「なんで、寝巻き？」

「お昼が終わつたら倒れる予定なのよ」

「なんで？」

「だって、今夜は決戦なのよ。どんなに体を汚されたとしても、わたくし自身の誇りは失われなければならないけど、やっぱり夫と再会する時はキレイでありたいっていう乙女心があるの」

「・・・旦那さんは？行方不明になって2年も経っているんだよ。ティナーは愛しているかもしれないけど、相手もそうだなんで保障はないじゃない」

ティナーから目を反らし今まで聞けなかったことを聞く。バツの悪さ丸出しの私にティナーは鈴の様にコロコロと笑った。

「絶対に愛されている自信があるわ・・・あの方とわたくしは15も年が離れているの。結婚した時、わたくしは16であの方は31」

「政略結婚？」

その問いには答えずティナーは話を続ける。

「あの方とは従兄弟の婚約パーティーで初めて会ったのだけど、ふふ。あの方だったら、まだ10歳になったばかりのわたくしに跪いて「私はあなたに出会うために今まで生きてきました。どうか、私と踊ってくださいませんか」って言ったのよ。わたくし、本当にビツクリしてしまって、咄嗟に従兄弟の後ろに隠れてしまったの。あの方は辛抱強く待つてくださったのだけど、結局、従兄弟の後ろから出れなかった。10歳の子供から見てもあの方は魅力に溢れていて胸が高鳴ったわ。あの手を取れてたらって思っても羞恥が先に来て駄目だった。けれど後日、あの方からお花を頂いたの。添えられていた手紙には「先日の言葉に嘘はありません」と書かれていたわ・・・嬉しかったあ。子供だった私があの方に恋をした瞬間よ。それから、15で婚約するまで子供のママゴトみたいな逢瀬。お茶したりお散歩したりお喋りしたり。忍耐よね。ふふ。結婚が決まった16歳の誕生日に初めて熱い口付けを交わしたわ。あの熱さは今でも覚えてるの」

「それは凄いな。愛されてるわ」

「ええ。そうよ」

「旦那さんのお名前聞いていい？」

「カイザー。カイザー・ステルツ・デル・ファールンソティー伯爵

よ。早く、あなたを旦那様に紹介したいわ」

ちなみに”デル”というのは、貴族ですよっという証明みたいなものらしい。

この世界は大きな大陸は2つあって、1つはアズミ大陸、もう1つは私がいるポメタニ大陸。

”デル”という貴族名を使っている国はアッスラーダ帝国といってポメタニ大陸の中では1番に大きいといわれる帝国である。

”デル”は、この国の言葉で”血”という意味で、アッスラーダの礎を築いたと言われる人たちに連なる血族〓貴族という図式らしい。

「楽しみにしてる。じゃあ夜はティナーは体調不良で寝込んで、テレサは付き添いだね？」

「ええ。わたくしの体調が悪い時はテレサも客を取ることを免除されるから。アウザーも看護してね」

「夜にティナーの部屋に入ったのバレたら折檻せつかんされるよお」

「こっそりよ。こっそり。それに、こんな生活は今日でお終い。後は幸せになるの。わたくしの可愛い子」

001 (後書き)

作品のタイトル決めが苦手です。
モブキャラって・・・

夜。村長宅の地下では、いつものように淫らな空気が流れ出していた。加工した太陽の魔石は通常より

薄暗く、辺りを照らす光は、怪しい雰囲気を出していた。昼間は素朴な村だったものが、今ではざわついて、いやらしい気配が漂っている。

なんとなく体がベタ付く感じが・・・空気が問題なのか。気持ちわりいな！

決して、前に風呂に入ったのが2日前ってことが原因ではない・・・はず。

この世界に来て脂っこい料理からヘルシー系料理に移行したのだけど（奴隷に与える食事が簡素なだけ。今日みたいな食事は滅多にない。ティナーからお裾分けはほぼ毎日だったけど）、いくら、あっちの世界ではヘルシー思考の日本人だったとしても昔の人とは違って食文化も牛だの豚だの生クリームだの動物性たんぱく質の摂取量が増えてた現代人は油っぽいのだ。こちらの世界に来た当初は、数日に1回の簡素なお風呂は拷問だった。ここやつと2年という月日が経過して油っぽさが抜けてきたような気がする。

元々、標準体重圏内の体重だったけど、全くもって締りのなかった体は皮肉にも、ここでの生活でキユツと引き締まった。しかも、胸の大きさに変化がないところを見ると今の私は、ロリ系アイドルとしてデビュー出来そうな体系かもしれない。わぁお。

顔は平凡だけだな！

オタクとしては、「ギャップ萌ええ〜」だけど、自分が対象じゃあ虚しい限りだ。腐女子同胞求む。

昼餉が終わって、宣言通りに倒れたティナーは侍女のテレサが看護

に入った。こういう待遇は貴族だからなのか、テイナーの扱いは丁寧だ。テイナーは特権娼婦と言われる特別な客しか相手をしない。その相手も特別というぐらいなのだから、貴族がお金持ちの類になってくる。だけど、客の中に知っている顔はなかった。地方伯夫人のテイナーは社交シーズンしか王都には行かないし、全ての貴族の顔を把握は出来ていない。周りで痴態な声が漏れ始めたのを確認して、そろりとテイナーの部屋に忍び込んだ。

「あれまあ」

部屋では、なにやら引越しの準備が始まっていた。隠してあったバッグに、これまで手直した衣装を丁寧に詰めていた。

なんて気軽さ！今から、ここって騎士たちが雪崩れ込んでくるはずだよな？騒然となるの必須だよな。

なに、この今から旅行に行きますっていう感じは！

「遅いわよ、トーコ。大方、片付けは終わってしまったわ」

「ご機嫌だね」

「ふふふ。楽しみで仕方ないわ。ほら、トーコ、こちらへいらっしやい。着替えましょう」

「は？着替え？」

「貴族の女性は、どんな時でも気丈に美しくよ」

「私は貴族ではないんだけど・・・ま、だから、テイナーもテレサも華やかだね」

露出を押さえたクリーム色のドレスを着たテイナーと紺色のワンピースを着たテレサ。背景のクドささえなかったら、この場所がどこか忘れそうだ。

あ。なんか、今の私の姿が痛いぞ。ダボダボの薄汚れたシャツとズ

ボンて・・・

「トーコ様、化粧台にいらっしやいませ。御髪のお手入れをいたします。それから着替えてくださいまし」

どうやら、私にも服を用意しているらしい。どんな服だろう。まさかのまさか、のっぺり日本人にゴテゴテドレスなんか着せるとか言い出さないよね。出てきたらどうしよう。女の子だしコスプレヤーとしては、ドレス自体は興奮する材料だけど、似合わない物は着たくないぞ。

化粧台の椅子に座り、1日分の汚れを取るように濡れたタオルを渡されてゴシゴシと顔を拭く。くふぁー、気持ちいいなあ。親父が飲食店に入って手拭で顔を拭く気持ちがよく分かるわあ。

拭き終わった後に、スカツとするね！

テレサは前髪をピンで器用に留めると、小さなナイフとピンセットを構えた。

「大人しくしてくださいな。怪我しますからね」

「はひい」

ジヨリジヨリ、抜き抜きと手際よく私の無造作眉を整えていく。男装している時は危険だからって理由で整えてなかったから、本当に久しぶりの感覚だ。両眉を整え終わり、もう1度タオルで顔を拭くと顔に張り付いた抜け眉がぴっちり付いた。おーおーよく生えてたな。

続いて濡れた櫛で何度も何度も梳いて、埃などを落としていく。濡れ濡れになった髪に柑橘系の香油を塗り込むと、それまで、ニコニコ顔で見守っていたティナーが小さく何かを呟いて髪が一瞬で乾かす。

すげーなあ、魔法。この世界の人間なら大小なりと魔力を持っている

てティナーは風を操ることを得意としている。テレサは火の使い手で寒い冬の時期は暖を取らせて貰ったことか。

私はもちろん異世界人だから魔力はない。トリップした当初は、チートキャラかと期待したが、全く持って素質はなかったし、精霊も見えない。あちこち浮遊しているらしいのに！

しかもさー、数ある異世界トリップのお話の中でもさー、チートじゃないなら美人とか博識な女性と神様に愛されると…逆ハートか？あるけど、私、真正銘のモブキャラだしなあ。

ただの女子高生に、電気の作り方とか泥水のろ過の仕方とか野菜の品種改良なんか出来ないし、ダムを作れといわれても水を塞き止めて掘れとしか言えない。

私の持っている知識なんて、オタク関連だけだぞ。革命なんか出来ん。

テレサは、私の体に白いシートを巻き付けるとジヨキリと髪を切り出した。厚い前髪を作り、胸下まである毛先の傷んだ部分を切る。

耳横はストレート、そして毛先20？を丸い櫛に熱を送る魔法を使いながら内に巻いていった。魔法便利。

あっという間に、平凡ながらも、それなりに見えるような容姿になった。

「はい。出来ました。後は衣装を・・・」

最後まで言い切る前に、上の方から、ゴゴオーンツツという音が響いてきた。

「わー！」

「あら、大変。奇襲が始まったようね。早く着替えましょう」

「落ち着きすぎだよ、ティナー」

キヤーとか、罵倒の声、ドーンツという激しい音が響く。大きな音がや低い振動が聞こえるたびに、体がビクリとなる。到底、気楽に着替えることなんて出来ない。部屋の外がどうなっているのかが気になってしょうがない。

こんな状況に陥るのなんか初めてですから。怖ひッツ！

どうしても着替えることが出来ず、座り込んでガクブルし始めている私にティナーとテレサが宥めてくるが無理。動けん。チビリそう。アワアワしていると、ドアの隙間かせ青く光っている蝶がヒラヒラと飛び入って来た。

なんだ、新手の呪いか！

「まあ！カイザー様の連絡蝶よ！」

ティナーは蝶に駆け寄り、それを胸に抱き込むと目を瞑って何とも言えない笑顔。今まで見た中で1番の

笑顔だ。ああ、本当にティナーの旦那様は彼女を愛しているんだなあー。ティナーだけに送る言葉を載せた蝶。それを聞き終わると、今度は蝶に何かを吹き込んで再び蝶を飛ばした。ドアからそれがすり抜けるのを見送るティナーの瞳に涙が滲んでいる。

良かった。あの様子だと迎えはもう直ぐっばいぞ。早く来てくれー、戦闘こえーよおー。

だが、安心するのはまだ早かった。グアアンツという音と共にドアが蹴破られたのだ。

あまりにもけたたまし過ぎる音に、ドアを凝視しつつポカンとしてしまった。壊されたドアの前には、ひげ面の厳つい男が目を吊り上げて立っていた。よくよく見たら、こいつ悪のお頭じゃないか！

その手に持っているのはなんだ！太い刃渡りのものはあれか、剣か！殺傷能力を磨きたいのか！

ギョロリとした目で、部屋中を見回した後、美しく着飾っているティナーに視線を向けて、ガナリ声で怒鳴り散らしてきた。

「テメーかあツツ！クソアマア！この事態を招いたのはテメエの仕事か！お前の部屋から青い蝶が出てくるのを見たぞツツ！もうここも終わりだ、クソツツ！テメエには逃げるまでの時間稼ぎをしてもらうぞ！こっちに来いツツ！」

ズカズカと大腿で歩み寄ってくる男に、ティナーはセレナと2人で体を硬くしながらも私を隠すように部屋の隅に逃げる。だが、そんな小さな拒絶など何にも役に立つわけなく、ティナーの細い手首を掴み上げて連れて行くとした。

「きゃあツツ！」

男の手を引つかいたり、踏ん張って歩みを止めようとしても体格差で全然役に立たない。それどころか、掴んでいる手首にグツと力を込めた。その痛みに眉を顰め、踏ん張っていた足から力が抜けるのを見計らって引き摺るように歩いて行く。

駄目ッ！このままでは連れて行かれる！

私は咄嗟に男に走り寄って、ティナーの腕を掴むその腕に跳び付いた。

「離してッ！」

「トーコツツ 危ないわ！！！」

「ティナーを離せえ〜〜ツツ！！！」

全体重をかけてティナーを奪還しようとしたが、子供サイズな私では全くもって足止めにもならない。

それでも無我夢中で男の腹を蹴ったり、腕に噛み付いたりした。う

げっ、毛むくじやらの腕、めちゃくちや気持ち悪ッツ。吐きそう。
剣の柄つかでガツガツと殴られるし。折角、テレサが整えてくれた髪型
もグチャグチャだし！
痛ッ！こんちくしょう。さっさとティナーを離しやがれッツ！！
ギリギリギリと渾身の力で噛み続けていたら流石に男も痛かったの
かティナーから手を離れた。

「クソ餓鬼があ！！！」

ティナーを離れた男は、思いつきり腕を振り上げて私を振り落とす
た。床にガツンと尻を打ち付ける。くう、ケツがへこんだあ！イテ
テとお尻をさすりながら、キッと男を睨み付けると男も忌々しそう
に私を睨みつけ持っていた剣を振り上げた。

物凄い勢いで下ろされているだろに急にスローモーションに見える。
逃げなきゃって分かっているのにマジでこういう時って動けな
いんだ。

男に切って捨てられるだろうという自分の状況が、どことなく現実
感がなくて他人事たにじの感覚だし、変な感じ。

ああ、モブキャラなんて、こんな最後なんだあ・・・だけど、痛い
のだけは嫌だなあ。

反射で目をギョッと強く瞑り、体を硬くして腕を交差してガードし
た。

痛みは来なかった。だけど、ティナーの悲鳴が聞こえた。悲痛な声。
恐る恐る目を開けて飛び込んできたモノに固まった。私の目の前に
両手を大きく広げたティナーがいた。

男は既に剣を振り下ろした後で、その剣先に赤い液体が付いていた。
なんだ、あれは。血？誰の血？ティナーの血？嘘だ！！

目を見開いて喉から声にならない悲鳴が出る。ティナーの体がゆら
りと揺れた。それから、ガクンと膝から床に崩れ落ちた。うつ伏せ

ふわっと笑ってティナーは意識を飛ばした。それにゾっとして私は血が体に付くのが構わず胸に耳を当てる。

トクントクントクン・・・生きてる。生きてる!!!
その心臓の音に安心して、また涙が出た。

「かあさまア」

再び傷をシートで押さえながら彼女の胸に縋り付く。傍らに膝を付くテレサも涙を流しながらティナーの顔に飛んだ血を拭き取っている。

助けて。早く助けに来て。彼女を早く迎えに来てえ。

心の中で助けを叫び続けていると、大きな手が突然、私の目を覆った。肩を後ろに引かれて体が傾く。

ビクリと体が震え悲鳴を上げた。あの男はどうした？逃げたのか・・・それとも今もここに？

震える体で渾身の力で暴れた。この暖かい手があつた男？嫌だ、触るな!!!

暴れてもビクともしない。切り裂くような声が自分から出る。喉が爆発してしまいそうだ。

その男の腕が私の抱きこむように伸ばされ何かに背が付く。暖かい何か。

なに？

「シィー。落ち着いて。ここにはもう敵はいない。ファーランソティー夫人の手当てをしなくてはいけない。さ、シートから手を離して。よく頑張ったね、お疲れ様。次に目が覚めた時には総べて終わっているよ。さあ、良い子だ・・・おやすみ」

周囲の音が遮断され、その声だけが直接に脳に響く。ふわふわする声の振動が徐々に私を眠りを誘い、震えていた体から力が抜けていく。

ほんとうに？

ていなあしなない？

こわいことはもうない？

うん。うん。だったらねるね。おやすみなさい。

意識を手放す最後に見たものは

深い緑だった

002 (後書き)

お気に入り、ありがとうございます〜！

更新、本当に本当に遅いのが申し訳ないですが、気長にお付き合い
下さい！

次あたりから、コメディに入るかと・・・更新は、

しばし待たれよッ！

ゆらゆらと浮遊する体が気持ち良い。暖かいよう。時折触れてくる熱が心地良い。このまま、ずっと気持ち良い場所にいたい。怖いのはイヤ。痛いのはイヤ。悲しいのはイヤ。優しい場所がいい。私を深く包み込んでくれる場所がいい。

だけど、駄目なんだよね。本当は分かってるよ。ここには駄目だって分かっているよ。

ティナーティナーティナーティナー・・・ティナー、大丈夫だよ。生きているよね。ねえ、お母様

・・・目を開けて、始めに飛び込んできたのは私の乳でした。

は？

目を開けて、自分の生乳が飛び込んできたらビックリするよね。んでもって、そんな事態になって出る言葉なんて、

「あれまあ」

つてなるよね。生乳から視線をずらすと自分の腹に太い腕っぽいものが巻き付いていました。しかも、弾力のある背凭れっぽいものが肩に当たります。

「おはよう。よく寝てたねえ」

脳天から耳に心地良い声が聞こえた。顔を上げると意識を失う前に見た”緑”があつた。深くて濃い緑。宝石の”碧”じゃなく、夏の森の”緑” 生命力に溢れたキレイな色。

ただど今は、その”緑”よりもビツクリというか驚愕なものが気になつて仕方ありません。

これをなんと表現したらいいのか・・・とりあえず言えるのは、ハリウッドスターを軽く凌駕し、あの真つ白なギリシャ彫刻も真つ青の美しい顔が「こんにちは」していました。

こ、これはどう表現したらいいのでしょうか？

つてか、これつて生き物でしょうか…弾力のある暖かい肉体は『生き物だよ』つて主張しているけどな！トリップしてから柄の悪いのか気持ち悪いオヤジしか見てこなかったから、この世界にはイケメンつていう生き物はいないもんだと思つていた。

ところがなんだ、この美貌！

鋼色の髪。濡れて少しウェーブは短く、額にかかる1房だけを残し髪は掻き揚げられていて激しく妖艶です。彫^{ほり}は深過ぎず、顔も濃過ぎない顔はほんの少しだけ女性的で、これは女の人に好かれるだろうという”美”を持った人。だけど、身体は硬く全然女性的なところはない。肩幅ががっしり広くて腰がキュツつて・・・こ、これは異世界トリップに登場するイケメンさんですね！会いたかつたです！

「気分は？」

低く甘い声。

視界を覆つた大きな手の持ち主はこの人だ。この”緑”はきつと味方。ティナーが呼んだ騎士団の人だ。ティナー・・・

あの後どうなつたのか知つている人。ティナーがどうなつたのか知つている人。大丈夫つて言った。敵はもういないつて言った。

いつまでも現実逃避をしていいはずない。聞かなきゃ。ティナーがどうなつたのか、テレサは無事なのか聞かなきゃ。恐れては駄

目だ。自分が直面したことなのだから。

「ティナーは？」

恐る恐る聞いたら、その緑の人はフツと笑って私の頬を濡れた手で撫でた。

「手当てを受けて眠っているはずだよ。今はファールンソティー伯爵が付き添っているはずだよ」

生きてた・・・

「会える？」

会いたい。会って顔みたい・・・

「すぐに会えるから、ほら、力を抜いて」

肩を撫でられて、ふうと息を付いた。知らず知らずに体に力が入っていたようだ。濡れた布で肩を優しく撫でられフニャアとなる。気持ち良い。この人の手、心地良い。

ん。

いやいやいやいやいや。ちょっと待て。

さっきまで不安と寝ぼけでスルーしていたけど冷静に考えてこの人誰だろう？

なんで私、初対面の人（しかも超絶美形）に抱えられてお風呂入れてもらってんだらう？

真っ裸だし。この人の目線から多分、全部丸見えなんじゃないの？私は、緑の人をボケっと見ていると、ふふと笑われながら顔を布で

拭われた。

!!!!!!

なにこの超絶な美しさを持つ生き物ツ！私つてば、今このお方のお膝の上にお姫様抱つこのように横座りさせられています。生尻失礼しますって感じですよ！

うお　　ツツ、めっちゃ下を確認したいが出来ねえよ！
つてか、本当にこの人誰ツツ！！！！

「……………あのう…どちら様でしょう？」

「聞くの遅いね」

「し、しゅみましえ〜ん」

緑の人は、私の背中に手を回すと、ひよいと立ち上がった。ひ！水が体から落ちる感覚が下へと引つ張られるみたいで怖い。思わず緑の人にしがみ付いてしまった。しまった、生乳が胸板にベツトリしてしまった。破廉恥か！心の中でうおお〜と絶叫しつつ体を離して、さりげなく両手で乳を隠した。下は体を丸くしたお姫様抱つこだから見えてないからね。

さつきチラリと見えた限りでは、緑の人は下にズボンっぽいものを穿いてらっしゃった。ツチ。

何も身に着けていなかったらどうしようと思っただけでも、実際に衣服を着ているのを見るとガツカリするのは何でだろう。

緑の人は私を椅子に下ろすと、ポンチヨのようなタオルで私を包んだ。足首まである柔らかな素材だ。ふわふわ。ちよつと客観的に見てテルテル坊主みたいかみしれない。緑の人は私から離れると私はそのタオルでゴシゴシと体を拭く。体を包んでいるそれでは髪までは拭けず放置したが、体はあらかた拭いてサツパリです。

どうやって頭を拭こうかと思案していると新たなタオルで髪を労わるようにパフパフとされた。緑の人だ。

「アルディオ。アルディオ・ジルファ・デル・ア・メノンドだよ。騎士団特部隊の隊長しています。この作戦の総指揮官としてきました。名前を伺ってもいいですか、お嬢さん」

「桃子です。桃子・安西と言います」

「トココココ。いや、トウコだね。君はこの村の子？」

「違います。私もティナーと同じで連れて来られました人間です」「酷い仕打ちを？」

「いいえ。ずっと男の振りをして来たし、ティナーが・・・ファールンソティー伯爵夫人が守ってくくださったから」

「ファールンソティー伯爵夫人は素晴らしい人だね。それに、あの胸当ては不思議な素材だったから、少し調べさせてもらったよ」

「構いません。本当にあれがなかったら女だと直ぐにバレてました」「君は魅力的な体していたしね」

「う。でも、子供並みの体格で助かりました・・・」

「年は？」

「18歳です」

「・・・18には見えないな」

「そうですね。この人たちは皆大きいですから。それでも私の成長期は終わっているんですよ」

緑の人を改め、アルディオは私の髪を拭き終わったのか、続いてテシサと同じように香油らしきものを髪に塗りこんだ。そして、呪文も何も唱えることなく髪を乾かした。ふわりと風に揺れた髪から蜜の香り。

「終わり。次は着替えだ、これをどうぞ」

そうやって渡されたのは、白のワンピースドレスと胸下で締めるタイプの皮製のコルセットだった。サイズは私のサイズに合っているようだ。なぜ？

それと、これは見覚えがある下着だ。

アルディオに向かつて、はて？と首を傾げてた。

「フアーランソティー伯爵夫人の侍女から君のものだと伺っているよ」

テレサが？あ。あの時に着替えるって言ってた服だ。

「可愛い・・・」

白の生地に細かい花と蔓の刺繍がしてある。手が込んだ作品だ。

いつまでも服を見つめていると、アルディオに着るように促されたけど、無理です。アルディオさんの麗しい美貌がキラキラと見つめていたら着替えられない。

いくら真つ裸を見られた身だろうと乙女の羞恥が・・・ワザとなのか。ワザとだな。なんか、空気が物凄く楽しそうだもん。

私はアルディオをジトつと半目で見るとアルディオも着替えると言つて笑いながら部屋を出て行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9807v/>

モブキャラ(仮)

2011年10月9日17時24分発行